

五條橋・横野旭風・絃旭操外三人・立方二▼
あつもり・小川旭華・絃旭操外三人・立方一▼
お嬢夫人・小原旭成・絃旭芳外四人・立方一▼
那須与市・中村旭園▼対王丸・藤巻旭鴻▼
黒田武士・八木隆・絃一同・立方一。

ラヂオ琵琶放送

○二月二十六日(午後三時十分NHK・FM)
「鉢の木」平山万佐子女史(三十分間)。
○三月六日(金)同右、「あゝ平家」壇の浦」
鶴田錦史、田中之雄、瀬戸竜介三氏。「大
森彦七」押田旭翁女史(六十分間)。

松野紫雲(三浦忠)氏

慢性腎炎のため二月二十六日逝去、享年八
十五才。日琵琶関西支部・錦心流一水会神戸
支部・琵琶蓮水会の各顧問。三浦蓮水会史の
夫君で琵琶楽に深い理解と興味を持ち「菊水
の旗」「政岡」「屋島懐古」「日蓮誕生」「
楊貴妃」「秋風五丈原」など約三十篇を作詞
して琵琶界に貢献された功績は大きく名声高
い紳士であった。告別式は二十八日営まれ琵琶
関係者多数参列焼香して永別を惜しんだ。
法名晴峰院法徳紫雲居士。謹んで哀悼の意を
表し御冥福を祈る。(西宮市羽衣町七ノ二九)。

予告

○琵琶と詩吟の演奏会 四月五日(日)正
午 東京都品川区西五反田五丁目水川神

社参衆殿(日蒲線不動前駅下車坂上)
主催秋声会、後援琵琶芸術協会ほか。
琵琶二十六曲(内来賓演奏六曲)、詩
吟六題。

○京都琵琶協会四月例会 四月十九日
(日)午後一時本部平井会長宅。

○芸歴六十周年記念演奏会 四月十八
日(出)正午金沢市能楽文化会館、主催若
宮旭登女史、後援北陸新聞ほか。会員
の外東西の名手数数氏出演。(筑前琵琶十
曲、錦心流琵琶六曲、立方二、外に詩
吟十三、詩舞一、新内一)。

○日本琵琶楽協会関西支部総会 四月
二十六日(日)午後二時京都国鉄西大路駅
前料亭京みやこ(会費三千元)。

○京都琵琶協会春季演奏会 四月二十
九日(休)正午京都東山松原上ル安井金比
羅会館。会員の外来賓数氏出演。(各
流派琵琶約二十曲演奏)。

○第四回琵琶名流演奏会 五月三十一
日(日)十時一十六時半京都烏丸夷川京都
商工会議所三階大ホール、主催日本琵琶
楽協会関西支部。各流派琵琶二十四
曲演奏。(有料)。

○琵琶楽名流大会 六月十四日(日)正午
東京日本橋証券会館ホール、主催日本
琵琶楽協会。各流派琵琶二十四曲(有料)。

きごとあ

春四月、さすがに老骨にも心の浮
きたちそめるのを覚える●京絃紙の
「予告欄」をもっと充実して欲しい
というご希望が数氏の読者から寄せ
られている●ごもっともな御要求で編集子も
何とかして豊富な「予告欄」にしたいと常々
考えているのだが仲々思うように参らず焦慮
している次第●以前にもお願いしておいたが、
たとえば演奏会の場合は二、三ヶ月前には開
催の日時、会場、出演者名などは決定して
いると思うから、プログラム印刷が出来上る前
に概略をご連絡下さるとか、ラヂオ・テレビ
で演奏の録音録画をされた時点でその放送放
映日時を放送局で云って呉れる筈だから、こ
れを事前にお知らせ下さらば「予告欄」に
掲載することが出来る●これらは読者諸氏の
御助力に俟たねば仕方のないことで労を惜
まず是非お願い申し上げたい●また琵琶楽
や現琵琶界についての御意見、御感想なども
併せて御寄稿下さって紙面を飾って欲しい、
他人を誹謗するような内容のものでない限り
喜んで登載させて頂く●京絃紙は毎月十日ご
ろに翌月一日号の編集を締め切って印刷に廻
すことにしているので、これに間に合うように
御連絡下さることを重ねて御協力願ひ上げる。

昭和五十六年四月一日発行(非売品)
編集者 植村寛 水
発行所 京市津之江北町一ノ二二三
〒569 高槻市 電話〇七二六(七三)六〇五一番

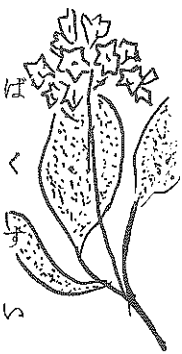
琵琶

京

結

第三二二号 京絃社

井伊大老と
安政の大獄(一)



寛永十六年に鎖国令が敷かれてから徳川幕
府二百数十年間の政策は、時の移り変りと共
に尊皇攘夷、或いは開国通商貿易と様々な大
きい渦の中に明け暮れた。その時、突如あら
われたのが、長い部屋住みのあと彦根三十五
万石の藩主となった井伊直弼である。

安政五年四月二十三日、突然大老職に任せ
られた井伊直弼は、直ちに政務の裁決に着手
した。幕府の大老職は、朝廷に於ける摂政関
白と同様で、將軍の代行として老中を指揮す
る絶大な権力を持っていた。

井伊大老は六月十九日、日米修好通商條約
に勅許を待たずに調印せしめ、同二十三日に
は堀田正睦と松平忠固の老中職を罷免して、
自分の懇意な太田・間部・松平乗全の三人を
老中として陣容を整え、二十五日には、將軍
の後嗣は紀州の家茂を決定と発表した。是等
の処置は朝廷を始め、尾張、水戸、越前の御
三家にも、他の有力な大名や有志にも反対が

多かったが、井伊は大老の権威に於いて、あ
らゆる反対を押し切ってこれを断行した。のみ
ならず凡そ自分に反対する者は総て処分した。
即ち、尾州家の慶徳と越前家の慶永には隠居
謹慎を命じて藩主の地位を剝奪し、水戸の斉
昭には謹慎を、水戸の当主慶篤と一橋の慶喜
は登城停止を命じて、その政事活動を封じた。
是等の人々は、いわゆる御三家御参卿又は親
藩として徳川一門のお歴々で、事情によって
は將軍の候補者の立ち場にある人なのに、遠
慮なく処分したほどだから、その他の人々に
対しては憚かる所なく之を捕縛し、之を斬り、
之を流罪にした。

その処置は安政五年九月七日京都で梅田雲
濱を捕えたほか、多くの有材な人が投獄され、
翌年十二月までの間に断罪が行われた。その
主な人を挙げると、水戸の家老安島帯刀は切
腹、死罪は橋本左内、頼山陽、吉田松陰、梅
田雲濱(獄死)など多くの人々で、処分の手

は朝廷にも延び鷹司大関、近衛左大臣、鷹司
右大臣、三條前内大臣、一條内大臣、二條大
納言等が或いは辞職、或いは謹慎となり、大
名では土佐の山内豊信、宇和島の伊達宗城な
どが隠居謹慎、幕府の重要役人岩瀬、永井、
川路、鶴殿、浅野らが蟄居又は隠居謹慎とな
った。これを安政の大獄という。

安政の大獄は、その範囲の広い点、その処
置の厳しい点に於て空前絶後であったが、同
時にその理由の不詳の点でも、この大獄の重
大な特色をなしている。一般には井伊は開国
を主張した進歩主義者であって、之に反対の
頑迷な攘夷論者を一掃したと云っているが、
開国を主張し、安政五年六月の日米修好通商
條約の責任者として署名した岩瀬肥後守が永
久蟄居を命ぜられている所から見ても、その
説の誤りであることが判るような気がする。

それならば何故に井伊はこの恐るべき大獄を
起こし、朝廷、幕府、諸藩に於ても、在野の
人々に在っても、総ての英才俊傑を一網打尽
に処分したのか。

そして万延元年(一八六〇)三月三日朝、
降りしきる雪の中に登城せんとする井伊大老
は、関鉄之介以下の水戸志士十七人と薩摩の
有村次左衛門によって、桜田門外で要撃され
命を落とした。防戦した彦根藩士六十人もよ
く戦ったが遂に叶わず、殆ど一瞬の裡にこの
惨劇は終りを告げ、さしもの井伊直弼もここ
に果敢なく散ったのである。

五絃閑話

水藤五朗



記録

今日は記録の時代である。ビデオテープの如く映像と音を同時に、しかも長時間にわたって録画出来るものがあつたり、音について随時に記録することが出来るカセットテープがあつたり等々、その方法についてだけ見ても記録の時代にふさわしく、いろいろなものが研究開発されて広く使われている。そして斯く今日生きる我々にとって、それを無視することは出来ないし、むしろそれ等を大いに活用する必要があると思う。

では、さしあたって何を記録するべきであろうか。今後の斯界にとって、何を記録することが大事であり、早急になすべきなのか等を、斯界の人々が話し合う必要があると思ふ。勿論、これ等のことは個人的な段階でなされてはいる。演奏会で写真をとったり、ビデオテープをとったり、カセットテープやオーディオテープで、演奏を録音したりすることはかなり行なわれてはいる。が、これは個人のための記録であつた。今後は、斯界の人々に供するための、更には、伝統文化と云う、一般社会に関連した意味での社会参加として

の責務として、公の記録をすることが望まれるものと、私は思う。

明治期以来、既に百年余りの歳月が琵琶人の中に流れている。第二次大戦からでも三十二年、この歳月を正しく記録しておく仕事は未だになされていぬのが実状である時、琵琶の百年史の作成が急務である様に思ふ。あと十年もすれば、明治期の琵琶人は今日の半数になる様に想われる。更に二十年後、琵琶人の年齢を考えると、明治二十年代から大正五年前後の三十年位の間にしぼられていて、いかにこの間が琵琶の隆盛期であつたかを偲ばせる。そして今、大正五年を下限とみて、この大正五年生まれの人は六十四歳である。又、大多数の琵琶人が誕生した明治四十年代を考えてみても、四十五年の人では七十歳を数えている。今日の平均寿命を考えればあと八年の余裕はあるものの、やはり老齡であることに間違いはない。この現実を無視することはできない以上、記録しうるもの、又、記録しておかなければならないものは、公の記録として社会の中に生かすべく、今日早急に着手すべきではなからうか。

芸能としての琵琶音楽は、社会の変遷に添って少しづつ様相を変じてゆくであろうし、後進者が稀少ながらも登場してくるものと思ふ。が、過ぎ去つた日々の実を、しかも個々個々に散逸している記録を継承してゆくことは難かしい。

琵琶が、とかく社会に普及しえぬ理由とし

て、その記譜法の未発達が挙げられる事があり、等、三味線、尺八等の他の邦楽器が、その面では漸次の進歩を遂げていることを考えると、琵琶にとつては、過去の事実の記録を含め、文字による人と音、即ち奏者の動向と、琵琶音の公の表記が大切なのであろう。個人や、流派を超越した公の表記が、である。

さしあたって、公の表記をどのようにするか問題である。公の団体がこれを衆人協議の下で行なうのが理想ではあるが、これをやる団体が当面はないと云うのが実状である。残念ではあるが現実である。特に、過去の琵琶界の事実の歴史的表記についてだけでも思ふのだが、今日そのような動きはない。

記譜法については、いろいろな問題があるので統一することは無理としても、表記についての研究がもう少しなされてもいいと思ふ。現実的な問題としては、薩摩、筑前、錦その他名曲、愛好曲として広く知られている曲を網羅した歌詞集が公刊されてもいいと思ふし、それは意義あることと思ふのだが、やはりなされないのが斯界の今日迄の実状であつた。

個人や、又、ある流派のためにこれ迄いろいろと努力されてきたこれらの記録の努力が、公のためのものとして広く行なわれた時こそ琵琶音楽の向上があり、伝承がなされたと思ふ。記録の時代に生きる芸能として、琵琶が社会からそれなりの評価を得ようと思ふのなら、琵琶人自身の手によって、記録、記

譜等の仕事が必要がある。

琵琶の普及にとつて、子弟の育成による芸能伝承や、演奏発表による芸術伝播等が急務であることは当然とする一方で、地味ではあるが、最も今日求められている作業としてこの「記録」することの重要性が認識されてゆかなければならない。

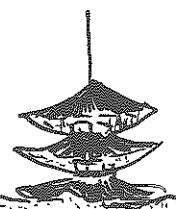
今後望まれる琵琶音楽は、もっともっと開かれた音楽であると云われている。一流派にのみ精通した奏者の演ずる芸には限りがあつた。琵琶の広い分野にまで心を開いた奏者による芸があつてこそ、琵琶の社会に於ける位置は安定すると指摘される。

過去、現在、そして未来の在り様が公記される斯界になっていけば、新初学者も入り易いのである。

琵琶歌中の

詩吟・和歌朗詠考(六)

編集部



(琵琶歌) 大楠公

大楠公 梁川星巖

豹死留皮豈偶然 湊川遺跡水連天
人生有限名無尽 楠氏誠忠万古傳
豹は死して皮を留どむ豈に偶然ならんや
湊川の遺跡水天に連なる 人生限り有り

名尽くるなし 楠氏の誠忠万古に伝う。

(作者は美濃の人、玉地吟社を立つ、安政五年歿、歳七十)

「註」 豈偶然に偶然のことではない。湊川遺跡に楠公の遺跡。水連天に川水が天に連なっているように尽きない。

「大意」 豹は死んで皮を留どめ人は死んで名を残すと云うのは決して偶然の事ではない。人は一代名は末代で楠公の遺跡は水が天に連なるように永遠に変わらぬ、その誠忠は万世に伝えて朽ちることがない。

(琵琶歌) 太田道灌

太田道灌 大槻磐溪

孤鞍衝雨叩茅茨 少女為遺花一枝
少女不言花不語 英雄心緒乱如絲

孤鞍雨を衝(つ)いて茅茨(ほおし)を叩く 少女為(ため)に遺(おく)る花一枝(いっし) 少女は言わず花語らず 英雄の心緒(しんしよ) 乱れて糸の如し。

(作者の名は清崇、仙台の儒者、明治元年歿、歳七十八)

「註」 孤鞍に鞍を置いた馬、単騎の武者。茅次(か)やぶき家。心緒(しんしよ)と読む。道灌の心の中心。

「大意」 馬上の道灌が急雨に逢い茅屋で蓑を借りようとしたがこの家の少女は無言で山吹の一枝を差出した。道灌は訳がわからず心中糸の乱れたように思ひ余つた。

太田道灌が江戸城から狩りに出かけ、帰途俄雨に逢う。後拾遺集の中務卿兼明親王の「七重八重花は咲けども山吹の実のつだに無きぞ悲しき」の実のと蓑を掛けたもの。(山吹は花は咲くが実は出来ない)

「楠公父子訣別之所」

志賀



国鉄山崎駅(京都駅から西へ四ツ目)から徒歩十五分のところに史跡桜井駅跡、大阪府三島郡島本町字桜井にこの碑がある。

延元元年五月、後醍醐天皇の命により足利尊氏を討つために兵庫へ向う時、死を覚悟した楠正成は、我が子正行にこの桜井の駅で、遺訓をして親子が別れた場所と、撰津名所図絵で伝えていたが、こんもりとした広い公園のような一劃にこの石碑が建つてある。また明治天皇の、子別れを詠まれた歌碑も残っていて、史跡としての体裁をなしている。

楠正成は、河内の国金剛山麓の土豪の家に生まれ、武勇に長じていたというが、父の名もハッキリしないようだから無名の人物であつたと思われる。それが北條幕府討伐を狙っていた後醍醐帝の夢見によって召し出され、奇襲戦法を以って王政復古(建武の中興)の立役者となり、その名を挙げた。

建武の中興は一応成り立ったが、論功行賞の不公平から武士達の不満を買ひ、謀叛の急先鋒となったのが足利尊氏で、正成は尊氏との和睦を進言するが天皇はこれを聞き入れられず、「新田義貞と力を合わせて戦うべし」という帝の命令で、止むを得ず死を覚悟して兵庫へ下るのであるが、正成は自分亡きあと誰が天皇をお守りするかが心残りであった。

そこで自分の意志を継ぐべく、下向の途中桜井の駅に馬をとめて、成人の腕には忠義を果たすようにとさとして、正行に河内へ帰れと云うが、正行は父の覚悟を聞いて是非共兵庫への同行を願う。けれども「忠義を忘れるな、これが父に対する最高の孝行である」と拒絶し、菊水の銘刀を形見に渡して西と東に別れるのが「楠公父子訣別之所」である。

「太平記」では、正行のとき十一歳、この感動的な物語も史実から見ると疑問がある。正行の年齢が幼過ぎるという。しかしながら、幼少のため正行が父の意志を充分理解できなかったとしても、河内へ帰るのには有能の家来を供に附けたであろう。その家来が河内へ連れ帰り、正行の母共々、日夜正成の志を説き聞かせながら養育し、遂に立派な「忠臣楠正行」を仕上げたと解釈しても良いのではあるまいか。

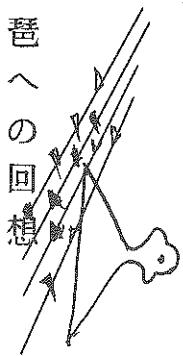
兵庫では、正成は湊川に尊氏勢を迎えて奮戦するが及ばず、七生まで人間に生まれ代つて朝敵を亡ぼさんと、弟正季と刺し違えて生涯を閉じる。乱世にあつて至誠を貫いたこと、

賞讃に値する。

しかし、正成も時代の変遷によって評価を異にする。戦国時代までは北朝側から朝敵扱いにされるが、江戸時代からは忠臣として急上昇、昭和大战後はまたその反動としてアレギー反応を示し、日本史の教科書などにはたつた一行の扱いになっていく。今の小中学生などの中には正成のことも子別れのこと知らぬというのが多く、「楠氏の論を読んで泣かざる者は人にあらず」と云ったことを考へるとき、筆者は一抹の淋しさを感じざるを得ない。

琵琶への回想

馬場 鴨水



錦心祭全国大会プログラムに毎年流祖永田錦心先生のお写真と小伝が掲げられる。その終りに、

「日本画は文展数回入選され、琵琶は二十才にして名人と言われるようになった。邦楽各界の長所を取入れて繊細華麗な曲風を作り流名を錦心流と呼ばれた。昭和二年十月三十日四十三才で逝去されました。」

さて私は若いころ宗家のレコードを聴いて琵琶の美しい曲風に魅せられ、次々とレコードを求めた。今もこの古いレコードから艶麗で生き生きした宗家のみ声が聞こえ、琵琶へのなつかしさと思ひ出が心の奥底からよみがえるのである。

明治から大正にかけて琵琶が一世を風靡し、学生間にももてはやされ、一般大衆に口ずさまれて名曲の数々が愛誦された。こうしたレコードが縁で私は錦心直門である京都唯一の丸山巴水先生の門を敲いて琵琶を習いはじめた。(大正六年) 滋賀師範水上競技会の晩餐会の余興に名曲「河内の宿」を演奏して教官たちが誉めてくれたのが思い出の一つである(大正十年)。その後三十年間は空白時代。昭和二十四年郷里疎開から二度目の京都市内転任。琵琶会場で図らずも同門絃友山田鶴水兄らに再会し、昔をなつかしみ、これを機会に指導を受く。ここに色付ハガキ印刷による演奏会プログラムの一つを掲げて当時を追憶し、今は亡き先輩諸兄を偲ぶと共に、琵琶の上に思いを馳せている。また楽しく生きる糧ともなる。

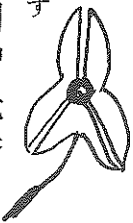
とき 昭和二十七年十一月八日(午) 午後五時開演
ところ 中京区寺町三條上ル 天性寺
主催 京都薩摩琵琶協会

組
七 西 馬 伊 古 馬
別 郷 隆 盛 落 女 流
白 崎 出 羽 隊 丞 盛 落 女 流
坂 能 出 羽 隊 丞 盛 落 女 流
舟 川 慶 寺 寺 寺 寺 寺 寺
恩 成 成 成 成 成 成 成 成
道 道 道 道 道 道 道 道
響 響 響 響 響 響 響 響
の の の の の の の の
彼 彼 彼 彼 彼 彼 彼 彼
方 方 方 方 方 方 方 方

追つて丸山巴水師の形見として琵琶一面と先生お得意の「だるま」一幅を頂いています。若き日への愛着の想い出としてい(五六・二・一)

天下の覇業成らず 苦惱で散った明智光秀

辻 旭 城



滋賀県・坂本の人たちはこう云っている。「光秀さんはよい人でした。百姓には何年目にか飢饉年があつて、そのときには年貢をまけたり延ばしたりして、私たちの願いを心よく聞いて下さつたと伝えられています。」

ここは明智光秀の坂本(大津市)城下街で、琵琶湖畔の聖衆来迎寺の表門は旧坂本城跡の城門だったという。明智の陣鐘も残っているし、西教寺には明智一族の墓や、明智左馬助が湖水渡りに使ったという馬の鞍がある。先祖から受け継がれてきた家々を、織田信長に焼討ちされた街だけに、慈愛深い光秀は人気が高い。

戦国時代織田信長は、中国高松城の毛利と戦っていた羽柴秀吉の応援として諸将を派遣するとき、幕下の十三將に令して秀吉の指揮下に入れることにしたが、この動員令は連名の順序が出鱈目で、上役の光秀を下位の諸將の下に置いたため、光秀の家臣らは、過去に主君光秀が信長から受けた人格侮辱や叱責の数々と併せて、その悲憤は頂点に達した。しかし光秀は冷静に家臣たちを慰諭したので、その場は大事に至らずに治まった。

ところが、信長からの最後の宣告がもたらされた。丹波と近江の現領地を取り上げ、信長が争つて手を焼いている毛利の領地石見、出雲両国を光秀の力によって乗っ取れ、といふ示達で光秀の重臣たちは激昂し、思慮深い光秀も遂に叛旗をひるがえすに至つたのである。そして天正十年(一五八二)六月二日の未明、京都本能寺に信長を襲つた。

その頃秀吉は備中高松城を攻略中で、戦国時代の英雄的人物、摂津高槻城主の高山右近からも秀吉応援のため、高松に向け行軍中だった。本能寺と二條城を襲つた明智軍は、勝ちに乘じて大軍を江州安土城に向けて之を落陥せしめた。そして光秀は、子の光春を安土城に置いて尾濃と北越に備え、三宅式部を京都守護職として諸寺に金帛を散じ、公卿や女官たちにも金銭を献上したので、光秀は征夷大將軍に任じられたというが、定かではない。

近畿の諸侯は向背の決定に迷い、信長の弔合戦に立つ者もなく、光秀傘下に屈する者もない。大和の筒井順慶などもそれであった。異変の急報に接した秀吉は、直ちに毛利と和睦して電光石火中国の戦線から馳せ帰り、ここに六月十三日の山崎合戦となった。しかしこの勝敗は、その前夜既に決まっていた。光秀は主君弑逆の罪に苦悩の結果精神的に参つていて大局観の立たなかつたのに対し、主君の仇を討つという大義名分の旗を押し立て、覇業達成の到来と勢い込む秀吉、山崎合戦は戦わぬ前に決定していたのである。

六月十三日未明、明智軍は死物狂いの攻撃を始めた。その支隊は天王山に急進し、山崎を眼下に銃撃せんとしたが、羽柴秀吉がここで迎え撃ち、將兵の数から見て形勢不利と判断した明智方は退却して、山崎の東町で雌雄を決することにした。この時羽柴方の中村一氏は、山崎の松山を占領して、樹木の深い道筋に目印を置き、樹木を伐つて銃隊を配置していたので、明智支隊は雨霰のように銃火を受けて忽ち敗退した。そして山崎の中央平地で激戦となったが、明智方の右翼の將御牧兼頼は明智の本陣に使者を送つて退却を勧告し、自身は応戦の後討死した。

光秀は御牧の報告で敗北を知り坂本城に引き上げる途中、不覚にも山城の小栗栖で土民の竹槍に刺されて、あえない最期をとげた。若い頃から信長の家臣として忠節を守り、計らずも悪に落ちて天下統一も僅かに十日余りで終つたが、結局は秀吉のために道を開いた形となつたのである。

琵琶界の所感

石橋 旭 嶺



芸の友主幹の鈴木誉士氏(九十才)が本年年頭所感に、人生の常道は礼節を守り信義を

重んじ、互譲博愛の気風をもって交際し、相寄り相扶けて明るく楽しい社界維持に努める事が琵琶芸道の基点であると云っている。我もその心掛で琵琶発展に尽くさねばならぬと思う。

願れば終戦後、人々は心をいやす場所を安意な詩吟や歌謡曲に求めて今日に至っているが、ようやく最近になって琵琶も世人が興味を持つようになって来た。これは家庭が裕福になり生活に余裕が出来たからで、また単純な詩吟から琵琶に転向する人も多くなった。しかし大正十年頃の琵琶全盛時代までにはまだまだ程遠い感が深い。

我々の人生航路も終着駅(八十才)に來ているが、琵琶を引継いでやってくれる者がどれほどあるか? 過般の成人式には男女併せて百五十万人と聞いているが、この中に琵琶関係者は? 心細いことである。

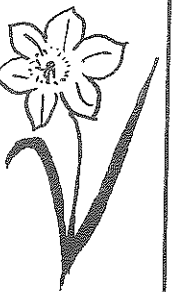
「京絃」や「芸の友」紙上では琵琶の先生が沢山居られるように思われるが、その割に発展しない原因は何か。年に一度や二度の演奏会を催したぐらいでは門人は増加しない。先生方の心懸け次第で世人に琵琶の良さを認識させ、何処へでも飛んで行って一般人に琵琶を聴かせる努力がなければ琵琶の発展は望めない。初代橋旭翁先生が全国を行脚されたのはその一例である。

京絃の植村主幹も本年々頭の辞で、今年の行事は少年少女や青年層の一人でも多くの琵琶新人養成に積極的な力を注がれん事を切望するとある。結局先生方の努力と奉仕の精神に待つはかばかと思われる。

(五六・一・二二)

今こそ心の琵琶を

前田 秋声



明治を起点として大正昭和にかけ一世を風靡した琵琶が、戦後急速に衰運をたどったのですが、さすがに千年の伝統をもつこの芸術が完全に消え去るわけはなく、最近再び興隆のきざしを見せ、特に琵琶の近代性を慕う新しい琵琶人の抬頭を見るに至ったことは、永年にわたって琵琶界の盛衰を見て来た者にとってこんな嬉しいことはありません。

只、気にかかるとは、琵琶における歌も演奏にも、表面だけのモノマネに陥ちかかっていることです。中には単なる器用にまかせての芸人風も現われています。これでは琵琶の滅亡をまねくものです。せつかく現われてきた琵琶再興の機運を、正しく守り育てるには、何と云っても、その基礎を古典に求め、古典の心の根として、その上に咲く花でなければなりません。

一九八一年はまさに大切な夜明けでありますから、軽薄な歌を排して、私たち日本人の心の琵琶、心の歌の興隆を願って新しく立ち上がるうではありませんか。

雪中常盤

故古谷竟水遺作



待賢門の朝風や 吉野竜田の花紅葉
競うが如き旗色も 乱れて源氏の一門は
皆ちりぢりになりけり
常盤の前は義朝が 果敢なき最後遂げけりと
聞いて嘆きに暮るる折形見思ふ我子らにさえ
俄かに危難迫り来て さらでも憂き身置きかねし
都を遁れ出で給う

哀れ二人の若達が 寒さに堪えず忍び音に
嘸り泣きするその様を いじらし辛しと思えども
百万余騎の大將に やがて成るべき御身らが
泣くは卑怯ぞと戒しむる母が心の憂き思い
胸も張り裂くばかりなり

雪灑笠檐風捲袂 嗚々素乳若為情
他年鉄拐峰頭險 叱咤三軍是此声

(雪は笠檐(りうえん)を灑(あ)つ)として風袂を捲く 嗚々乳を索(もと)むる若為(いかん)の情ぞ 他年鉄拐(てつかい)峰頭(ほうとう)の險三軍を叱咤(しつた)するは是(これ)此(こ)の声(こゑ)

日本芸術琵琶會二月例会

二月十五日(日)午後一時東京文京区大塚六丁目貸席京屋で開催。門琵琶。伴流謡切第七弾法一山崎錦幽。城山一曰比稱子。白虎隊一杉山富士代。詩吟二題一奈佐喜八。別れの盃一佐藤旭尚。吹雪の敵一曰比錦花。簾の梅一丸田旭琴。湖水乗切一福島張水。俊寛一坂入晴峰。大物の浦一金森旭輝。設楽ヶ原一青木早水。西郷隆盛一長谷川錦舟。敦盛一杉山旗水。將軍悲歌一若宮旭登。弾法の数々一鈴木流泉。以上研修を終り小宴の後六時半散会。

大阪道明寺天満宮で琵琶献奏

二月二十二日(日)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。白虎隊一矢野旭信。扇の的一朽木旭明。山科の別れ一島津旭都。別れの盃一米原旭智。曲垣平九郎一作花旭友。君が代一多和綾子。二〇三高地一辻旭城。常陸丸一石橋旭嶺。衣川一尾山旭瑞常。勤進帳一田中敷水。五條橋一天津旭八千代。坂崎出羽守一中島旭穂。外に尺八、詩吟、劍舞、日舞など数番。天満宮の社宝革帯は菅原道実公が身につけていたものといわれる。梅を愛した菅公が祭神で梅木の種類も境内に多くて三十種あり二百五十本の梅花が祭りにふさわしく咲き揃って参詣者も多く盛会であった。

京都梅原旭濃女史

二月八日(日)昼大阪市旭産業会館で開催の社団法人関西吟詩文化協会驚声吟詠会と華洲会

の合同大会に招かれ「新撰組」を熱演して絶賛を博し吟詠家一同に多大の感銘を与えた。また三月四日向日市の市民ホールで老人クラブ主催の慰安会に「新撰組」を演奏して五百人の聴衆を喜ばせた。

京都琵琶協会三月例会

三月八日(日)午後一時本部平井会長宅。ようやく春の気ざしを感じさせる天気晴朗のこの日、馬場鴨水、林旭萌、楊嶽水、同夫人、梅原旭瀧、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、桜井旭富、木下皇水、水内煖水、平井春嶺、植村冥水、並びに琵琶愛好の国友、野賀、高橋三氏を来賓に迎え、芸談雑談に続き吉野山懐古一楊夫人。小栗栖一桜井。西郷隆盛一牧。桜狩一馬場。井伊大老一木下。道成寺一植村。敦盛一楊。桜田の淡雪一山岡。以上研修演奏のあと、四月二十九日協会主催演奏会の出演順抽籤や諸般の協議が終って、故馬場夫人七回忌の供養として馬場氏が夕食の饗応接待をされ、乾盃のあと御馳走になり六時半なごやかに散会した。尚本日全出席会員の賛成を以て楊夫人が協会の賛助会員に席をつらねられた。

ものがたり琵琶杉山旗水演奏会

三月十五日(日)午後五時東京上野本牧亭、主催後援会、後援晴風会ほか(有料)。白虎隊一杉山富士代。秋風故郷の山一若宮佳乃。仁科信盛一岩崎竜風。本能寺一藤内鶴孔。

筑前琵琶演奏会

三月十六日(日)午前十時半大阪難波新地高島屋ホール、主催団野旭兜、後見西川旭操、後援日本旭会。団野旭兜米寿祝賀の会。舞曲荒城の月一松尾旭枝。絃会員合奏。坂本竜馬一武木田旭晃。絃旭将。衣川一青木旭千、鈴木旭鈴、別所旭美。絃旭八千代。曾我兄弟。大西旭恵。絃旭孝外二人。立方二。村上喜剣。蒲原旭長。天の羽衣一宮口旭陽生、松尾旭枝。高比良旭栄。絃旭操外四人。立方一。新撰組一高旗旭光、竜場旭鳳。絃旭鳳外二人。立方一。未練西行一塩谷旭洲。絃旭弘。青の洞門一坂井旭蘭。羅生門一渡辺旭寂、板倉旭富。絃旭成外五人。鳴物一。綱鎗一土師旭華。谷口旭孝、高千穂旭楓。絃旭操外四人。鳴物一。祝賀の詞一秋元旭晨。絃旭将外一人。安宅の関一会主団野旭兜、竹本旭将、山田旭晃。絃旭瀧外三人。立方一。伽羅の兜一西川旭操。絃旭園外二人。立方一。坂崎出羽守一天津旭八千代。絃旭操外二人。立方一。月に偲ぶ一笠田洋。絃旭桂外二人。立方一。若き敦盛一木庭旭山、中島旭穂。絃旭華外二人。秋風故郷の山一樹本旭風。絃旭操外三人。立方一。栗津の露一梅原旭瀧。吉野山懐古一松尾旭紅。絃旭園外三人。立方三。壺坂寺一坂田旭弘。